

Anne Frank の入眠幻覚 (その2)

— 「親友 Hanneli Goslar が出てくる幻視」における Anne Frank の恐れと罪悪感—

山根 望*・名島潤慈

Analysis of an Anne Frank's Hypnagogic Hallucination in Which Her Close Friend Hanneli Goslar Appears (2) : Focussing on Hidden Fears and Guilty of Anne Frank

Nozomi YAMANE and Junji NAJIMA

(Received September 30, 2005)

On November 27 in 1943, Anne told her diary her hallucination in which Hanneli Pick-Goslar, one of her best friends, stood silently, staring at Anne. This hallucination shows that Anne was tormented by a sense of guilty for all Jewish people who were sent to concentration camps by Nazis. Scholars, however, hardly explain why this particular friend, Hanneli, appeared in Anne's hallucination and why Anne saw the hallucination on November 27 in 1943. In the paper, we discuss some reasons why Anne saw Hanneli in her hallucination from the viewpoint of dreamer-centered dream analysis in order to reveal Anne's circumstances and psychological states at that time. As a result, it can be concluded that the hallucination arose from (a) Anne's guilty for Hanneli herself; (b) her lost friendship with Hanneli; (c) her fear about arrestment by Nazis; (d) her failure of eyesight; and (e) her loss of her important fountain pen as well as her guilty for Jewish people who were sent to concentration camps.

Key words : Anne Frank, Hanneli Goslar, visual hallucination

I 本稿のねらい

われわれは「Anne Frank の入眠幻覚 (その1)」において、Anne の生活史や1943年11月27日に Anne が見た Hanneli の幻視について記述した。本稿ではさらに、Hanneli の幻視が Anne に出現したことの理由や、その幻視の意味について吟味してみたい。ちなみに、Anne と Hanneli との関わりや生活史は表1にまとめておいたので参照されたい。

II Hanneli Goslar の幻視についての考察

1. Hanneli の幻視について

幻視を見た時の Anne の精神状態を明らかにするために、まず Hanneli が象徴しているも

* 山口大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専修

表1 Anne と Hanneli の生活史

| 年号 | 生じた出来事 |
|------|--|
| 1928 | 11月、ドイツのベルリンで Hanneli が誕生する。 |
| 1929 | 6月12日、ドイツのフランクフルトで Anne が誕生する。 |
| 1933 | 7月、Anne の父親の Otto がオランダのアムステルダムに移住する。 12月、母親の Edith と姉の Margot がアムステルダムに移住する。 |
| 1934 | 2月、Anne がアムステルダムに移住する。 4月、Hanneli 一家もナチの迫害を逃れてアムステルダムに移住する。 5月、Anne はモンテッソーリスクールの幼稚園部に入園し、Hanneli と出会う。 |
| 1939 | 3月、Anne の母方祖母がドイツのアーヘンからアムステルダムに移住する。 |
| 1940 | 5月10日、ドイツ軍がオランダに侵攻する。 10月、Hanneli に妹が生まれる。 |
| 1941 | 10月初めに Anne と Hanneli はモンテッソーリスクールから強制的にユダヤ人中学校へ転校させられる。 10月、Anne は Jacqueline van Maarsen と仲良くなる。 |
| 1942 | 1月、Anne の母方祖母が癌のため亡くなる。 7月6日、Anne とその一家は急遽隠れ家での潜伏生活に入る。 10月、Hanneli の母親が産褥熱で病死する。 |
| 1943 | 6月、Hanneli と家族はオランダのヴェステルボルク中継収容所に連行される。 11月27日、Anne が Hanneli の幻視を見る。 |
| 1944 | 2月15日、Hanneli とその家族は北西ドイツのベルゲン＝ベルゼン強制収容所に移送される。 8月4日、Anne とその一家が治安警察に逮捕される。 9月3日、Frank 一家はヴェステルボルク中継収容所からアウシュビッツへの最終列車で移送され、9月6日、ポーランドのアウシュビッツに到着する。 10月28日、Margot と Anne はベルゲン＝ベルゼン強制収容所に移送される。 |
| 1945 | 1月6日、Edith がアウシュビッツ第2収容所で死亡する。 1月27日、Otto のいたアウシュビッツ第1収容所がソ連軍により解放される。 2月25日、Hanneli の父親が死亡する。 2月に Anne と Hanneli はフェンス越しに再会し、Hanneli が Anne に食料を渡す。 2人は計3回再会する。 2月末か3月初め、最初 Margot がチスフで死去し、しばらくして Anne もチスフで死去する。 3月、Hanneli がチスフに伝染する。 4月、ベルゲン＝ベルゼン強制収容所がイギリス軍に解放される。Hanneli 一家のなかでは、Hanneli と妹のみが生き残った。 |
| 1946 | Hanneli と妹はパレスチナ（後のイスラエル）に移住する。 |
| 2002 | 子ども3人に恵まれた Hanneli はイスラエルで生活している。 |

のについて考察したい。幻視を見て1か月ほど経った1944年1月6日の日記において、Anne は Hanneli の幻視について「Hanneli はわたしにとって、わたしの親しい人全員の苦難の象徴のように思えます」と書いている。そこで、「親しい人全員」とは、強制収容所に移送されたユダヤ人同胞のことであることは間違いないだろう (Hoagland, 1998; Lee, 1999; Müller, 1998)。しかし、ここで改めてユダヤ人同胞の象徴としての Hanneli を吟味してみたい。

Anne は Hanneli について「わたしの前に立った彼女は、ぼろぼろの服を着て、痩せこけた、やつれた顔をしていました。目だけが異様に大きく、その目がとても悲しげに、責めるようにこちらを見ている」と説明している。きちんとした衣服を与えられず、また飢餓状態にある Hanneli の姿は、ナチによって強制収容所に連行されたユダヤ人同胞の姿と共通している。潜伏生活中の14歳の Anne が強制収容所の様子を知るとは困難だったように思われるが、以下に引用する1942年10月9日の日記によると、Anne がナチによるユダヤ人迫害についてかなり詳しい情報を入手していたことがわかる。

きょうは悲しくて憂鬱なニュースばかりです。たくさんのユダヤ人のお友達が、いっぺんに10人、15人と検束されています。この人たちは、ナチス秘密警察からこれっぽっちの人間らしい扱いも受けず、家畜を運ぶトラックに詰めこまれて、ドレンテにあるオランダ最大のユダヤ人収容所、ヴェステルボルクへ送られてゆきます。このヴェステルボルクというのは、うわさに聞くだけでも恐ろしいところです。人びとは飲み水はおろか、ほとんど食べるものもなく、水道が使えるのは1日に1時間だけ、トイレも洗面所も、1000人にひとつしかありません。男も女も、全員がいっしょくたに寝かされ、女と子供とは、たいがい頭を丸坊主にされています。脱走することはまず不可能です。みんな髪を刈られていますし、大半のひとはユダヤ人独特の顔だちをしているので、一目で収容者だと見破られてしまうんだそうです。

オランダ国内でさえこんなにひどいのなら、もっと遠いへんぴな土地へ送られたら、いったいどういうことになるでしょう。わたしたちの推測では、ほとんどのひとは虐殺されていると思われます。イギリスのラジオでは、みんな毒ガスで殺されていると言っています。あるいはそれが、いちばんてっとりばやい死にかたかもしれません。

Anne が潜伏生活に入って3か月ほどで、1日における水道の使用回数などヴェステルボルクについてこれだけ詳しく知っていたことは驚きである。情報源は、毎日欠かさず聞くラジオと協力者たち、特に Miep Gies であった (Lee, 1999; Müller, 1998)。大人でも恐怖を感じるほどのヴェステルボルクにおけるユダヤ人の状況や毒ガスによるユダヤ人大量虐殺についての情報は、14歳の少女の心に多大な影響を及ぼしたことであろう。ただし、幻視のなかの Hanneli の服装については、強制収容所でユダヤ人が着せられたダビデの星印を胸につけた縞模様の囚人服ではなく、おそらく一般的な服装であったに違いない。なぜなら、Anne はラジオと協力者たちからしか情報を得ることができなかったのも、強制収容所でのユダヤ人を視覚的に想像することはできなかったのではないかと考えられるからである。

2. Anne が知っていた Hanneli 検束の情報

ユダヤ人同胞の象徴として Hanneli が幻視に現れた理由の一つに、Hanneli がナチに検束されたことを Anne が知っていた可能性が高いことが挙げられる。そのことについて Müller (1998) は、「アンネはハンネリ一家が6月に検束されたことを知っていて、きつともうポーランドで

死んだのだろうと想像していた」と簡単に書いているだけである。したがって、ここでは、Anne が Hanneli が検束されたことを実際に知っていたかどうかについてより詳しく吟味したい。1943年11月27日の日記において Anne は、「ハンネリはあんなに恐ろしい運命に陥らなくちゃならないのでしょうか」と書いている。この一文から、Hanneli が他のユダヤ人たちと同じく、ナチに検束され、少なくともヴェステルボルクに収容されたことを Anne は知っていたと推測される。「Anne Frank の入眠幻覚（その1）」で述べたように、Anne が幻視を見た当時 Hanneli はすでにナチに検束され、ヴェステルボルクに収容されていた。ヴェステルボルクは中継収容所で、収容されたユダヤ人は数週間のうちにアウシュビッツへと移送されたが、Hanneli はパレスチナへの移住者名簿の第二リストに加えられていたので、検束されてから半年近く経ってもヴェステルボルクに収容されていた。ナチにとって、移住者名簿の第一・第二リストに加えられていた者はイギリスとの捕虜の交換の際に利用できるということで、他のユダヤ人よりは優遇されていたからである。実際、Hanneli は収容所内にあったユダヤ人の孤児院で働き、ナチがユダヤ人をアウシュビッツに大量移送したさいに選別から逃れることができた（澤田，2005）。

アムステルダムに住むユダヤ人の様子がわかりさえすれば、ユダヤ人である Hanneli が検束された可能性が高いことを Anne は推測できたであろう。以下に引用する1942年11月19日の日記によると、Anne がナチスによるユダヤ人検束を目撃していたことがわかる。

数え切れないほどのお友達や知り合いの人たちが、恐ろしい運命に見舞われています。毎晩のように、緑色や灰色の軍用トラックが地響きをたててやってきては、一軒ごとに家の呼び鈴を鳴らして、ユダヤ人はいないかとたずねてまわり、もしあれば、即座にその一家を連行してゆきます。いなければ、またつぎの家の呼び鈴を鳴らします。隠れ家にでも身をひそめていないかぎり、ぜったいに逃げられません。（中略）夕方暗くなってから、わたしもよく見かけるんですけれど、善良な、なんの罪もない人びとが、泣き叫ぶ子供たちにつきまとわれながら、列をつくってぞろぞろ歩いてゆきます。行列には監視役がふたりばかりついていて、ころびそうになるほどひどくこづいたり、つきとばしたりしながら、居丈高に追いたててゆきます。だれだろうと容赦はありません。

Anne は「夕方暗くなってから、わたしもよく見かけるんですけれど」と書いているが、この文章はユダヤ人の多くが、外出禁止令が出ていた夜8時前後に検束されていたという証言と一致する（澤田，2005）。おそらく、1942年の11月当初から最後の大規模検束が行われた1943年の6月まで、Anne はナチスに連行されるユダヤ人たちを目撃することがあっただろう。しかし、1943年の冬までに、アムステルダムからすべてのユダヤ人が姿を消した。彼らは、検束されたか、潜伏したか、逃亡したかのいずれかであった。1943年の冬には、アムステルダムで目撃されるユダヤ人は、殺されて運河に浮かんでいるもの以外にほとんどいないという状態であった（Gies & Gold, 1988）。したがって、後に詳述するが、潜伏できない Hanneli 一家の検束は Anne にとってかなり確実なものとなっていたはずである。

3. Hanneli の検束を Anne に教えた人物

Hanneli が検束された可能性が濃厚になれば、好奇心の強い Anne は、外部の情報を隠れ家にもたらしてくれる協力者にその真偽を訊ねたであろう。いつ誰が Anne に Hanneli が検束

されたことを伝えたのかについては、『アンネの日記』(完全版)、アンネの伝記、関係者の回想録のどれにも明記されていない。したがって、ここでは筆者が伝記から推測したことについて述べたい。

Anne は Hanneli 一家のことや Frank 一家が隠れ家に住む前に飼っていた猫について Miep によく訊ねていた。また、Anne は Hanneli 一家の第3子が死産であったことを知っていた (Müller, 1998)。では、Anne は隠れ家の外の情報を誰から聞いていたのだろうか。Anne に Hanneli が検束されたことを教えた可能性が一番高い人物は協力者であった Miep Gies であろう。なぜなら、Miep は Jacqueline の向かいに住んでおり、Jacqueline の母親と言葉を交わす間柄であったからである。では、Miep は Hanneli が検束されたことについてどれだけ知っていたのだろうか。

Anne の友人に関する Miep の情報源は、Anne と Hanneli の親しい友人であった Jacqueline van Maarsen であったと考えられる。ユダヤ人であった Jacqueline は、Anne や Hanneli とともにユダヤ人学校に通っていた。そこで Anne と知り合い、急速に仲良くなった。本来ならば Jacqueline もユダヤ人として検束されるはずであった。しかし、Jacqueline はユダヤ人リストから除外された。

Jacqueline が検束を免れた理由は大きく3つある。まず、ブティックを経営していた母親が、カソリック教徒のフランス人で、元々ドイツにルーツを持つ「アーリア人」であったことである。つまり、Jacqueline は「アーリア人」の血を半分持っていたことになる。次に、Jacqueline の父親は敬虔なユダヤ教徒で、Jacqueline と彼女の姉妹はユダヤ教信徒共同体に入っていた。検束から逃れるため母親は奔走し、母親が反対したにも関わらず父親が Jacqueline たちをユダヤ教信徒共同体に無理やり入れたという作り話をでっちあげた。幸運にも、この作り話がナチに認められた。さらに、ナチは不妊治療をしたユダヤ人は検束から除外したのであるが、Jacqueline の父親は何とかして偽の不妊治療証明書を手に入れることができた。Jacqueline 一家は、このような幸運が重なり、検束という最悪の事態を逃れることができた。その結果、ナチス占領当初 Jacqueline はユダヤ人中学校に転校させられたが、ユダヤ人リストから除外された後はオランダ人専用の中学校へと転校させられた。

Anne が潜伏生活に入った後、Jacqueline は Hanneli とともに放課後よく遊んでいた (van Maarsen, 1990)。親しい友人であった Hanneli が検束されたことは、Jacqueline にとって衝撃的なことだったはずである。Anne は Miep に Jacqueline や Hanneli の状況を訊ねることがよくあった (Gies & Gold, 1988; Müller, 1998)。Hanneli が検束されたという Anne にとって恐ろしい事実を Miep は隠そうとしただろう。しかし、いつものように彼女は、Anne の質問から逃れられなかったはずである。Miep は Anne が彼女から情報を得ようとする様子を以下のように回想している。

もしも探偵になっていたら、アンネはきっと名探偵になったことだろう。なにか隠していると、たちまちそれを嗅ぎつけてしまい、いろいろと鎌をかけたり、探りを入れたり、まじまじと見つめたりする。そんな風に見られると、ついわたしは目を伏せてしまい、隠しておこうとしたことをいつのまにかしゃべってしまうのだった (Gies & Gold, 1988)。

Anne に対して隠し事のできない Miep は、Anne にとって一番の情報源であっただろう。しかも、Anne は Miep が Jacqueline の母親と言葉を交わす間柄であることを実際に知って

いたし、Miep から Jacqueline 一家が検束を免れて戦前と変わらずに暮らしていることを伝えられていた (Gies & Gold, 1988)。Anne は Jacqueline が検束されずにすんだことを Miep から聞いていたのだから (Müller, 1998)、ユダヤ人が街から消えてしまった夏以降に Anne は、Hanneli が検束されたかどうかについて Miep に訊ねたであろう。そして、Anne の質問攻めに耐え切れず、Hanneli が検束されたことを Miep が Anne に話した可能性は高い。

オペクタ商会でタイピストとして働いていた Bep Voskuijl (1919–1983) も、Anne に Hanneli がナチに検束されたことを伝えた可能性がある。Anne は協力者のなかで一番若かった Bep と特に親密な関係で、Bep と片隅でひそひそ話しをしていた。Anne は同級生の 1 人が検束されてポーランドに移送されたことを Bep から聞いていた (Lee, 1999)。しかし、Bep が Hanneli と面識があったのかどうかや、Hanneli が検束されたことを知っていたかどうかについては全くわかっていない。なぜなら、第二次世界大戦後、Anne についてのインタビューが行われた際に Bep はいつも Miep の隣に静かに座っており、ほとんど話すことはなかった。また、1980年代に Anne に対する関心が急激に高くなったが、Bep は Anne に対する関心が高まる前に亡くなったので Miep のように回想録を書いてはいないからである (Anne Frank House Amsterdam, 2001)。したがって、Hanneli が検束されたことを Miep と Bep のどちらが Anne に伝えたのかについて明確な答えは出せない。しかし、2人いずれか、もしくは両者から Anne は Hanneli の検束について聞いたであろうと考えられる。

4. Hanneli に対する Anne の負い目

他の誰でもない Hanneli が幻視に現れた理由を明確にするために、Hanneli に対して Anne が持っていた感情について考察したい。1943年11月27日の日記で Anne は、「目だけが異様に大きく、その目がとても悲しげに、責めるようにこちらを見ているので、わたしにも彼女の内心の思いが読みとれました。『ああ、アンネ、どうしてあたしを見捨てたの？ 助けて、どうか助けて、この地獄から救い出して！』」つまり、この文章からは、Anne が Hanneli を見捨てたと考えており、それを負い目を感じていることがわかる。そこで、Hanneli に対して Anne が負い目を感じるようになった要因について考察したい。

まず、Anne が Hanneli に対して負い目を感じた理由として、Frank 一家が潜伏生活の共同者として Goslar 一家を選ばなかったことが挙げられるだろう。Anne と Hanneli は非常に仲が良く家族ぐるみの付き合いであった。両家ともドイツ系ユダヤ人で、Hanneli は祖父母と暮らしていたが、両親と姉妹 2 人という家族構成という共通点があった。また、Hanneli の父親はユダヤ人移民のための相談所を Frank 一家が住んでいたアパートの隣に開いていた。それで、子どもたちだけでなく親も両家を行き交い、Frank 家に Hanneli の父親が仮装して出かけるなど非常に親しい間柄だった (Lee, 1999; Müller, 1998)。しかし、Otto は潜伏生活の共同者として Goslar 一家ではなく van Pels 一家を選んだ。その理由として、1942年7月当時 Hanneli の母親が 3 人目を身ごもっていたことが考えられる (1942年10月に Hanneli の母親は産後の産褥熱で死亡し、赤ん坊も死産であった)。さらに、Hanneli の妹は1942年当時まだ 2 歳であった (澤田, 2005)。Anne のような中学生であれば物音すらたてることの許されない潜伏生活を送ることもできたであろうが、2歳の幼児には不可能である。まして、新生児のいる潜伏生活などできるわけがなかった。Otto はこのような理由から van Pels 一家を選んだものと考えられる。Otto のこの選択は賢明なものであった。しかし、自分たちが生き残るために同じユダヤ人同胞を選別したことにもなる。

次に、Anne が Hanneli に対して負い目を感じたもう 1 つの理由として、Goslar 一家は自分たちで潜伏生活を行うことが困難であったことが挙げられるだろう。ナチに見つかる危険性を最小限にするために、そして、家族のうちで一人でも多く生存者を増やすために、たいていは家族がばらばらになった。つまり、Frank 一家のように着々と準備を整え、家族全員で潜伏生活を送ったケースは非常に稀であった。多くの場合、ユダヤ人の子どもたちは、抵抗組織の協力のもと非ユダヤ人家族に預けられ、そこでユダヤ人らしくない名前を付けられた。したがって、子ども一人だけナチに検束されることも多かった。ヴェステルボルクで Hanneli は、そのような子どもたちが集まった孤児院で働いていた。結局は、孤児院の子どもたちもアウシュビッツへと送られてガス室で殺されたのではあるが（澤田，2005）。Frank 一家のように家族全員で潜伏するにしろ、家族ばらばらで潜伏するにしろ、協力者の存在は不可欠であった。しかし、敬虔なユダヤ教徒で、ユダヤ人移民のために相談所を開いていた Hanneli の父親が、Otto のように絶対的な信頼のおける非ユダヤ人の協力を得ることはかなり難しかったであろう。

さらに、経済的な理由で Goslar 一家は潜伏生活を送ることができなかったと考えられる。1942年7月5日の日記によると、Goslar 一家が自宅のアパートの一室を間借りさせていることがわかる。また、Hanneli の父親は窮乏していたユダヤ人移民から最低限の相談料しかもらわなかった。Goslar 一家がこのような経済状況であったので、Anne と違って Hanneli は自転車やスケートシューズなどといった贅沢品を買うことができなかった（Müller, 1998）。したがって、Goslar 一家がどのような形にしろ潜伏生活を送ることは経済的にむずかしかっただろう。まして、逃亡などできるわけがなかった。Goslar 一家がナチによる検束を逃れられないということは、Anne にもよくわかっていただろう。したがって、Goslar 一家、つまり Hanneli に対する Anne の負い目は非常に大きかったはずである。それゆえ、他の誰でもない Hanneli がユダヤ人の苦難の象徴として Anne の幻視に現れたものと考えられる。

5. 潜伏前の Anne と Hanneli との関係

Hanneli が幻視に現れた別な理由として、潜伏生活前の Anne と Hanneli との間にできた小さな確執が挙げられるだろう。1943年11月27日の日記に、「以前は彼女を誤解していたし、あんまり幼すぎて、彼女の悩みが理解できなかったんだ、って。彼女には新しいお友達ができ、そのお友達と親しくなりましたが、どうやら彼女にはわたしが、そのお友達との仲を裂こうとしているみたいに思えたようなのです。気の毒に、いったいどんな気持ちでいたことでしょう！」と書いてある。この記述から、Anne が Hanneli の新しい友だちに嫉妬していた可能性がある。そこで、Anne の性格をより明確にするために、潜伏生活に入る前の 2 人の関係について考察したい。

ユダヤ人中学校に強制転校させられる前 Anne は、Sanne と Hanneli の 3 人で徒党を組み、他の子どもたちとは距離を置いて遊ぶようになっていた。広場でも 3 人だけで映画スターについておしゃべりしたり、ファッション雑誌を読んで楽しんだり、男の子のことでくすくす笑いあったりしていた（Lee, 1999）。特に、Anne と Hanneli との結びつきはかなり強かった。Hanneli の両親は敬虔なユダヤ教徒であり、シオニストでもあった。したがって、Hanneli は安息日である土曜日には学校を欠席した。一方、Otto は敬虔なユダヤ教徒ではなかったので、Anne はめったにシナゴグに行くことはなく、土曜日でも学校に登校した。日曜日に Anne は欠席した Hanneli に宿題を渡し、Hanneli と遊ぶという取り決めを行っていた（Müller, 1998）。しかし、この 3 人の長年にわたる関係は、1941年10月初めに 3 人がユダヤ人中学校に

転校させられてから少しずつ変化した。まず、SanneがAnneやHanneliとは違う中学校へ転校させられてしまった。AnneとHanneliは共に同じクラスになって隣同士に座り、始終おしゃべりをして先生に怒られるほどであったが (Lee, 1999; Müller, 1998)、新しい学校で2人それぞれに新しい友人ができた。

AnneはJacquelineと、そしてHanneliはシナゴークで出会った新しい友人と急速に仲良くなった (Lee, 1999; Müller, 1998)。AnneがJacquelineと出会ったのは中学校の新学期最初の日であった。自転車で帰宅途中、AnneはJacquelineに声をかけ、彼女に前の中学校でのことやボーイフレンドのことなどを洗いざらい話した。屈託のないAnneはJacquelineにとっては非常に魅力的に見え、また内気で物静かだったJacquelineはAnneの良い聞き役となった。その日の夕方にはAnneはJacquelineを自宅に招き、夕食をご馳走した。彼女たちは興味が一致し、好んで同じ本を読むなど友情を深めていった。特に、思春期を迎え、性に関する興味が非常に大きくなっていったAnneにとって、年の離れた姉がいて性に関する知識を持っていたJacquelineはAnneの好奇心を満たしてくれる重要な友人であった。AnneとJacquelineが仲良くなったことで、自然とHanneliもJacquelineと遊ぶことが多くなった (Lee, 1999; Müller, 1998; van Maarsen, 1990)。

しかし、潜伏前には2人の間に小さなわだかまりができていたようである。1942年7月1日の日記には、「土曜の晩に、ジャックがうちに泊まりにきました。ところが日曜の午後には、ハンネリのところへ行ってしまったので、こっちは退屈で死にそう」と書いてある。Jacquelineはこの日の出来事を以下のように回想している。

アンネはともするとつきあいにくくなることができました。(中略) わたしは彼女がほかの子とつきあってもなんとも思わないのに、彼女は焼き餅を焼く。(中略) “午後には〔ジャックが〕ハンネリのところへ行ってしまったので、こっちは退屈で死にそう”と書いているくだけがありますけど、この日のことはわたし、よく覚えています。リースとふたり、彼女のベッドにすわって、話をしました。リースはアンネがなにかといえば彼女をからかって、ちょっぴり意地悪をするというので、アンネに腹を立てていました (Lee, 1999)。

Jacquelineの回想から、Anneは独占欲が強く、焼きもちを焼くことが多かったことがわかる。1943年11月27日の日記にある「彼女には新しいお友達ができて、そのお友達と親しくなりましたが、どうやら彼女にはわたしが、そのお友達との仲を裂こうとしているみたいに思えたようなのです」という箇所から、Hanneliの新しい友人に対してAnneが焼きもちを焼いたことでAnneとHanneliとの間に確執があったことがうかがえる。また、Jacquelineの回想によれば、Hanneliに対するAnneの言動が原因で2人の間に確執ができていたことがわかる。このようなグループ内の確執は思春期の女の子にはよくあることで、年齢が進むにつれて自己内省が深まったり、あるいは友人たちとのコミュニケーションを重ねたりするなかで確執は解消されることが多い。しかしながら、Anneはこの日記の5日後には誰にも別れを告げることができずに急遽潜伏生活に入らざるを得なかった。つまり、AnneはHanneliとの間にできた確執を解消する機会を失ってしまったのである。当時まだ13歳だったAnneには、冷静に自分の行動を省みて、HanneliとJacquelineの心情を慮るといったことはできなかったであろう。しかし、Anneが14歳になって精神的に成長し、また潜伏生活が長く続くなかで自己内省の時間が増えたことで、Hanneliに対する罪悪感を認識できるようになったと考えられる。それは、

1943年11月27日の日記に「わたしには彼女を助けてあげられないし、かつての過ちの償いをすることもできない」という文章に表れている。このように、Hanneli に対する Anne の罪悪感是非常に大きかったことがわかる。

6. 急速に悪化した潜伏生活

これまで、Hanneli が幻視として現れた理由を分析してきたが、1943年11月27日の日記に Anne が書いているように、Anne はほとんど1年近くも Hanneli のことは思い出さなかった。では、なぜこの時期に幻視を通して Hanneli を思い出したのであろうか。その理由としては、1943年夏以降に Hanneli が検束されたことを知った可能性が高いということが挙げられる。加えて、何かしらの心理的要因が関係していたはずである。したがって、次に1943年秋以降の Anne の心理状態に焦点をあてたい。Otto は第二次世界大戦がすぐに終わり、潜伏生活も短期間で終わるであろうと考えていた (Lee, 1999; Müller, 1998)。潜伏生活当初、Otto と同様に Anne も潜伏生活に対して楽観的であったことが、以下に引用する1942年7月11日の日記から読みとれる。

ところで、隠れて暮らすというのがどういう気分のものか、さだめしあなたも知りたいことでしょう。でも、じつをいうと、自分でもまだよくわからないんです。この家では、ほんとうにわが家に帰ったような気分になれることは決してないでしょうけど、かといって、ここが嫌いだということでもありません。どちらかという、すごく変わった貸し別荘で休暇を過ごしてみたい。隠れ家生活のことを言うのに、これはばかげてるかもしれませんが、わたしにはそう感じられるんです。この《隠れ家》は、身を隠すのには理想的なところですよ。床がわずかに傾いていますし、湿気もひどいんですけど、こんな快適な隠れ場所は、アムステルダムじゅう探したって、いえ、オランダじゅう探したって、ほかにはないでしょう。

この日記からは、Anne が潜伏生活をせざるを得なくなった自分の境遇を嘆いたり、潜伏生活に対して悲観的になったりしていないことがわかる。むしろ、生活するのに多少問題があるとはいえ、非常に快適な隠れ家であることをうれしく感じ、潜伏生活を乗り越え、戦争を生き残れるであろうと楽観的に思っている Anne の姿がうかがえよう。この隠れ家に対する安心感には1942年11月19日、1942年12月13日、さらに1943年5月2日に言及されている。例えば、1943年5月2日の日記には、「ここでの生活を考えるたびに、潜伏生活をしていないほかのユダヤ人たちに比べたら、天国にいるようなものだと思います」と書かれている。

しかし、隠れ家、つまり潜伏生活に対する Anne の安心感は、1943年の夏以降から急速に失われていったようである。その理由として、まず1943年の夏以降、戦況が悪化し、アムステルダムが空襲を受けるようになったことが挙げられる。Anne は、1943年7月19日の日記に空襲を受けたアムステルダムの様子について以下のように述べている。

きのうの日曜日、北アムステルダムが激しい空襲を受けました。被害は相当にひどいようです。地区全体が廃墟になり、犠牲者や生き埋めになった人たちを掘りだすのは、何日もかかるということです。(中略) そのときの鈍い、遠雷のとどろきのような爆音を思い出すと、いまでも身の毛がよだちます。それはわたしたちにとって、近づいてくる破滅を意味するものにほかなりませんから。

空襲が始まって雷のような爆音や、火事で真っ赤に染まるアムステルダムが窓から見えても、Anne たちには逃げる術がなかった。隠れ家にも空襲で命を落とす危険があり、また避難するために隠れ家を出たらナチに見つかる危険性があった。そのような状況のなかで、Anne が隠れ家に対して抱いていた安心感は急速に失われていったものと考えられる。

1943年の夏以降、Anne たちがナチに見つかる危険性を高めた要因がもう1つある。それは、密告者の存在である。1943年6月に大規模な検束を行った後、ナチは潜伏者を見つけるために、通告者に報奨金を与えるようになった (Lee, 1999; Müller, 1998)。そして、1943年秋には、Anne たちの隠れ家の存在を疑いはじめた人物が現れた。オペクタ商会の倉庫で働きはじめた Van Maaren である。1943年9月16日の日記には、「わたしたちのもうひとつの気がかりの種は、倉庫で働いているファン・マーレンというひとが、《隠れ家》の存在を疑いはじめたということです。(中略) あいにくこのファン・マーレンというひと、もともとあまり信頼のおけない人柄のうえ、とくべつ詮索好きで、はぐらかすのがむずかしい相手なんだとか」と書かれている。Van Maaren 自身がオペクタ商会の従業員で、しかも隠れ家に通じる倉庫で働いていたことで、Anne たちはそれまで以上に物音に気をつけねばならなくなった。Van Maaren がナチに密告するのではないかと Anne の不安はかなり大きかったようである (Gies & Gold, 1988)。実際、1944年8月4日に Anne たちがナチに見つけられた時、隠れ家までナチを案内したのは Van Maaren であった (Chiarello, 1994)。

さらに、1943年の秋以降 Anne を含めた潜伏生活者たちは、隠れ家内で起きた2つの問題に苦しめられた。まず、1943年の秋以降食料が急激に不足しはじめた。ナチがオランダに侵攻して3年経ち戦況がますます悪化したことで、一般のオランダ人でさえ食料を手に入れることが困難になった。潜伏生活者である Anne たちに食料の配給券が支給されることはなく、闇で手に入れるしかなかった。その配給券の価格もうなぎのぼりに上がっていた。苦しい戦況のなかで、Miep は配給券を手に入れるために四苦八苦ししていた (Gies & Gold, 1988)。

次に、この時期 Anne たちの潜伏生活を脅かしたものは、協力者たちが相次いで病気になったことである。まず、Bep の父親で協力者の Herr Voskuijl が末期癌であるという診断を受け (1943年6月15日の日記)、1943年秋には Miep がひどい風邪を引き (Gies & Gold, 1988; 1943年9月29日の日記)、Johannes Kleiman (ヨハン・クレイマン) が病気になり (1943年9月29日の日記)、さらに Bep Voskuijl がジフテリアで6週間も欠勤せざるをえなくなった (1943年11月17日の日記)。Anne たちの食料品や日用品を手に入れてくれていた協力者たちが次々と病気になってしまったことで、潜伏生活も1943年の秋以降急激に悪化した。物質面だけでなく、精神的な拠り所でもあった協力者たちが次々に病気になったことで、潜伏生活に対する Anne の不安はますます増大したことであろう。つまり、1943年の秋、Anne たちがナチに見つかったり、食糧難で飢餓状態になったりする危険性が高くなっていた。したがって、ナチによる検束と飢餓を Anne に想起させた Hanneli の幻視は、近い将来に Anne 自身がナチに見つかり、連行されるかもしれない、あるいは、このままだと餓死するかもしれないという警告的側面も有していたのではないかと考えられる。もともと夢の持つ主要な機能は夢主に警告を発したり、危機に対する対処の手かかりを夢主に与えたりすることにある (名島, 1999, 2003)。このことは夢だけでなく、入眠幻覚にもあてはまると思われる。

7. 幻視を見た当時の Anne の状態

度重なる空襲や食糧難、そして密告という不安な生活のなかで、Anne の心身も危機的な状

態になっていった。まず、灯りが十分につけられない生活が原因で、Anneの目が急速に悪化した。本を読んだり、ものを書いたりするさいにAnneは目を細めるようになり、それが原因で頭痛までするようになっていた。潜伏生活では、視力が絶対に必要であった。なぜなら、不注意のせいで物音を立ててはならないし、読んだり書いたりして静かに時間を過ごさなければならなかったからである（Gies & Gold, 1988; Lee, 1999; Müller, 1998）。つまり、Anneの視力の低下は、他の潜伏生活者にとっても大きな問題であった。したがって、この問題は協力者を含めて全員で討論された。結局Anneには眼鏡が必要であるという結論に達した。討論の後しばらくしてMiepは歩いて10分もかからないところに眼科があり、自分がAnneを検査のために連れ出すことを提案した。しかし、ナチに発見・通告される危険性があまりにも高いということでMiepの提案はOttoに却下された（Gies & Gold, 1988）。読書好きで日記を書くことが大きな心の支えとなっていたAnneにとっては、視力の低下は精神的にも大きな打撃であったし、隠れ家を出るというMiepの提案は、一時的なものであったにせよ、Anneに大きな恐怖心を抱かせたことであろう。

また、思春期のAnneにとって目は、視力だけの問題ではなく、容姿に関わる重大な問題であったに違いない。思春期になると少女は自分の容姿に関心を向けるようになるものであるが、容姿や外見に対するAnneの関心は周囲が驚くほど大きかったようである。例えば、潜伏生活中でもAnneはちょっとした化粧をし、マニキュアを爪に塗り、髪をカールしていた（Lee, 1999; Müller, 1998）。そのようにAnneは自分の容姿に関心を示していたのであるから、自分の魅力が大きな目であることを自覚していたであろう。Anneは1942年10月14日の日記に「マルゴーに、わたしってひどいブスだと思うかと訊いてみました。いいえ、けっこう魅力的で、とくに目がきれいだと返事」と書いているが、周囲の誰もが認めるほどにAnneの目はきれいであった。彼女の大きな魅力であった目を悪くしてしまったことは、多感で周囲の視線を気にする14歳のAnneには大きな喪失感をもたらしたに違いない。

大きな目に対するAnneの執着は、幻視にもよく表れている。1943年11月27日の日記には、「いつまでこのことをくよくよ考えていてもしかたありません。考えても、どうにもならないことです。ただ、彼女の大きな目がたえず眼前にちらついて、忘れようとしても忘れられないだけです」と書いてある。同日の日記でHanneliの目について3回も言及していることは注目すべきことである。痩せこけたHanneliの目についてももしもAnneに「夢素材連想質問」（名島, 1999, 2003）をしたとすれば、Anneはおそらく自分自身の目と関連づけたであろう。Hanneliの大きな目は、Anneにユダヤ人同胞やHanneli自身に対する負い目や罪悪感を喚起させたと同時に、魅力的な目を喪失するのではないかという強い恐怖感から目に強い執着を持っていたAnneの心理が投影されていたと言えるかもしれない。また、Hanneliの目が「悲しげ」であったことは、潜伏生活を強いられ、その上魅力的であった目を喪失しつつある自分自身を嘆いているAnneの感情が表れていると見ることができる。

視力の悪化に加えて、1943年9月からAnneには抑うつと心身症的な症状が表れはじめた。まず、冬を前にして、Anneのうつ状態が深刻になっていった。1943年9月16日の日記には、「わたしも毎日の不安と憂鬱とを忘れるため、鎮静効果のある吉草根の錠剤を飲んでいますが、翌日いっそう気がめいるのを予防することはできません」と書いてある。それ以前の日記には不安や憂鬱といった表現がないことから、1943年の9月くらいからうつ状態が始まったようである。さらに、Hanneliの幻視を見た19日前の日記（1943年11月8日）から、Anneの精神状態がますます悪化していたことがわかる。

たぶんお気づきでしょうけど、目下のところわたしは、ちょっとした鬱状態です。なぜそうなのかはうまく説明できませんけど、たぶん、わたしが臆病だからというだけのこと。そしてこれが、このところわたしがしょっちゅうぶつかってる問題なんです。

きょうの夕方、ベッパがまだここにいるとき、入り口の呼び鈴が長く、けたたましく、突き刺すように鳴りわたりました。わたしはたちまち真っ青になり、急な腹痛と、激しい動悸とに襲われました。すべてが強い怯えからくる症状です。

夜になって、ベッドにはいると、自分がパパやママと別れて、たったひとり地下牢にいるような気がしてきます。ときには、路傍をさまよっていたり、《隠れ家》が火事になったり、夜中に兵隊がきて、わたしたちを連行していったりする場面が目につかび、つい絶望のあまりベッドの下に逃げこんで、身を隠してしまうことを想像します。すべてを実際に目の前で起こっているようにまざまざと見てとり、そのあともずっとこういうことが、じきに現実になるかもしれないという恐怖から逃げられません。(中略)

いつかまたいい世のなかがきて、わたしたちが普通に暮らせるようになるなんて、とても想像が付きません。もちろんわたしだって、「戦争が終わったら」なんてことをよく話題にしますが、それはたんなる空中楼阁、けっして実現することのない夢なんです。

うつ状態が3か月も続き、ちょっとした音に過剰に反応したり、強度のおびえから顔面蒼白や激しい動悸になったり、さらには苦痛な出来事を繰り返して想像しては絶望感に苛まれたりするといった状態に Anne が陥っていたことがわかる。

さらに、Anne の精神状態に追い討ちをかけるような出来事が起こった。Anne が母方の祖母からもらった万年筆を Anne の不注意で焼失してしまったのである。Anne にとってこの万年筆が非常に重要であったことは、以下に引用する1943年11月11日の日記からわかる。

わたしの万年筆は、どんなときにも、わたしの持ち物のなかでいちばん貴重なものでした。これはわたしの秘蔵の品で、とりわけ大事にしているのが、太いペン先。それというのも、ペン先が太くないと、どうもほんとうに思うような文字が書けないみたいな気がするからです。

潜伏生活中日記を書くことが Anne にとって最大の喜びであったが、万年筆はその貴重な時間になくってはならないものであった。単に文字が思うように書けるだけではなくて、その万年筆は、Anne にとって自分自身が大人になったような気持ちにさせてくれた特別な万年筆であった(1943年11月11日の日記)。さらに、その万年筆は亡くなった母方の祖母の思い出の品であった。アーヘンで暮らしていた Anne の母方の祖母は、1939年3月にナチの迫害を逃れてアムステルダムに移住し、Frank 一家のもとに身を寄せた。1942年1月29日に癌で亡くなるまで、母方の祖母は Frank 一家の家事を手伝ったり、Edith を精神的に支えたりしていた。母方の祖母が快適なスツールに腰掛けている姿は、「目立たないけれど大事な家具の1つ」のようであった。スツールに腰掛けた彼女は、Frank 一家やそこを訪れた人々に温かな雰囲気を提供していた(Müller, 1998)。そのような理由で、亡くなった母方の祖母が Anne の夢の中で守護天使となって現れたのであろう(1944年1月6日の日記)。Anne にとって母方の祖母は、彼女に安心感を抱かせる存在であったのだから、母方の祖母がくれた万年筆は Anne にとってお守りのような意味合いがあったに違いない。しかしながら、Anne は豆磨きをした後、誤って古新聞とともに大事な万年筆をストーブに投げ捨ててしまった。日記執筆の大事な友であり、母方の祖母か

らもらった大事な万年筆を焼失してしまったことは、Anne に大きな喪失感をもたらしたことであろう。同じ11月11日の日記には、「たったひとつ、ささやかながら慰めがあります。わたしの万年筆は、火葬に付されたということです。わたしもいずれは火葬にしてもらいたいと思っていますから」と書いている。この文章から、大事な万年筆を焼失してしまったことに対して、Anne が自分自身を慰めようとしていたことと同時に、焼失した万年筆に自分自身の最期を重ねていたことがわかる。Anne の母方の祖母はアムステルダム近郊にある村に埋葬されたのであるが、その時はじめて Anne は死と直面した (Müller, 1998)。したがって、母方の祖母がくれた万年筆を Anne の不注意で焼失してしまったことは、潜伏生活に対する Anne の安心感を喪失させたと同時に、Anne に自分自身の死を想起させたであろうと考えられる。そして、万年筆を焼失してしまった2週間後に、Anne は Hanneli の幻視を見たのである。

Ⅲ おわりに

本稿では、Anne が1943年11月27日の日記に記した親友 Hanneli Goslar が出てきた幻視について考察した。

1944年1月6日の日記で Anne が夢であると述べていることもあり、今まで Hanneli の幻視は夢であるとみなされてきた (Hoagland, 1998; Lee, 1999; Müller, 1998)。しかし、「Anne Frank の入眠幻覚 (その1)」で述べたように、Anne が見たものは夢ではなくて幻視であった。また、Hanneli の幻視はこれまで、ユダヤ人同胞全体に対する Anne の罪悪感という観点からしか述べられていなかった (Hoagland, 1998; Lee, 1999; Müller, 1998)。しかし、本稿では1943年11月27日に Hanneli が幻視に現れた理由を吟味することによって、①1942年6月20日に親友 Hanneli が検束されたことを Anne が知ったこと、② Frank 一家がナチの検束を逃れるために Goslar 一家ではなく van Pels 一家を選んだことで、Hanneli に対して Anne が感じた罪悪感、③潜伏生活に入る前に Anne の焼きもちが原因で Hanneli との間にできた確執、④急遽潜伏生活に入らざるを得なくなったために修復できなくなった Hanneli との友情関係、⑤ナチに対する大きな恐怖心 (空襲・食糧難・密告されることへの恐怖を含む)、⑥ Anne 自身の視力の低下 (ナチに見つかる可能性が増したことで Anne の不安が大きくなったことと、視力の低下で目を細めて見るようになったことで魅力的な目が失われたことに対する Anne の喪失感を含む)、⑦ Anne の精神的な支えであった万年筆の (不注意による) 焼失、⑧物質面でも精神面でも隠れ家を支えてくれていた協力者たちの病気、といった複数の要因が混ざり合ったものであることが判明した。

Anne のように潜伏生活をしていたものを「潜伏生活サバイバー」と呼ぶとすると、『Anne の日記』を読めば明らかであるが) 潜伏生活サバイバーは強制収容所に連行されたホロコースト・サバイバーと比べると非常に恵まれた環境にあった。それゆえ、自分自身の潜伏生活体験は語りづらい。したがって、潜伏生活サバイバーが第二次世界大戦当時どのような心理状態に置かれていたのかについてはよくわかっていない。しかし、Hanneli の幻視を分析しただけでも Anne が潜伏生活を送るなかでかなり精神的に追い詰められており、抑うつや心身症的な症状に悩まされていたことがわかった。したがって、ホロコースト・サバイバーだけでなく、潜伏生活サバイバーの心理状態にも今後注目していく必要があるのではなかろうか。もちろん Anne 自身は最終的にはベルゲン＝ベルゼン収容所で亡くなったのでサバイバーではなく犠牲者となってしまったのではあるが、Anne が見た Hanneli の幻視は、なかなか公にならない潜伏生活サバイバーの心理状態を示してくれる貴重な幻視であるように思われる。

文 献

- Anne Frank House Amsterdam. (2001) : <http://www.annefrank.org/content.asp?PID=48&LID=2>
- Chiarello, B. (1994) : *The Utopian Space of a Nightmare : The diary of Anne Frank*. H. Bloom (Ed.) (1999) : *A Scholarly Look at The Diary of Anne Frank*. Philadelphia : Chelsea House, 85-99.
- Gies, M. & Gold, A. L. (1988) : *Anne Frank Remembered : The story of the woman who hid the Frank family*. New York : Simon and Schuster. 深町眞理子 (訳) (1994) : 思い出のアンネ・フランク. 文藝春秋.
- Hoagland, M. M. (1998) : *Anne Frank on and off Broadway*. H. Bloom (Ed.) (1999) : *A Scholarly Look at The Diary of Anne Frank*. Philadelphia: Chelsea House, 75-84.
- Lee, C. A. (1999) : *Roses from the Earth : The biography of Anne Frank*. Viking. 深町眞理子 (訳) (2002) : アンネ・フランクの生涯. DHC.
- Müller, M. (1998) : *Das Mädchen Anne Frank*. Claassen Verlag. 畔上 司 (訳) (1999) アンネの伝記. 文藝春秋.
- 名島潤慈 (1999) : 夢分析における臨床的介入技法に関する研究. 風間書房.
- 名島潤慈 (2003) : 臨床場面における夢の利用—能動的夢分析. 誠信書房.
- 澤田愛子 (2005) : 夜の記憶—日本人が聴いたホロコースト生還者の証言. 創元社.
- van Maarsen, J. (1990) : *Anne en Jopie : Leven met Anne Frank*. Amsterdam : Balans. 2. druk edition. 深町眞理子 (訳) (1994) : アンネとヨーピー—わが友アンネと思春期とともに生きて. 文藝春秋.